

## 「草枕」における風景の捉え方に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 小嶋 健志郎  
熊本大学工学部 学生会員 増山 晃太

熊本大学工学部 正会員 星野 裕司

### 1.はじめに

#### 1-1.背景

夏目漱石が執筆した小説「草枕」冒頭部分のモチーフとなった山道は、現在「草枕ハイキングコース」と名づけられ、多くの漱石愛好家に利用されている。同コースは熊本県熊本市島崎町にある岳林寺から熊本市を象徴する山である金峰山の麓を通り、玉名市天水町の漱石が宿泊した宿である前田家別邸にたどり着くまでの約 15.8km に指定されている(図 1)。途中には漱石が立ち寄ったといわれる茶屋跡や、漱石が書いた俳句の碑などが点在している。この土地の風景は、「草枕」の題材として取り上げられるほど強い印象を与えた重要なものである。

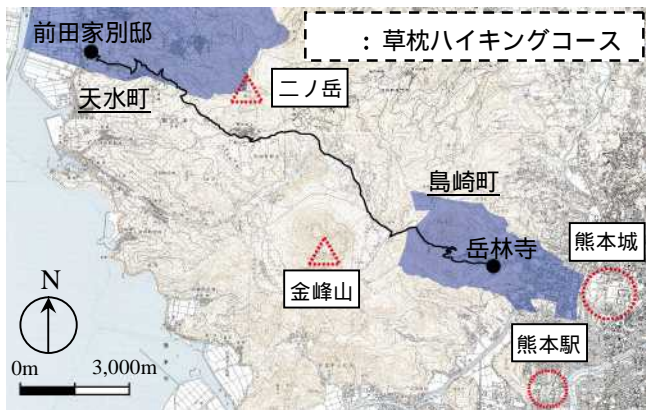


図 1 草枕ハイキングコース

#### 1-2.目的

草枕ハイキングコースの風景をつくりだす大きな要因である地形に着目し、「草枕」における風景描写との関係を考察することで、風景の捉え方に関する一つの知見を抽出することを目的とする。

#### 1-3.論文の構成

本研究の構成は、以下の通りである。

- 2章. 地形の分析を行い、「草枕ハイキングコース」がどのような特徴をもつコースであるのかを考察する。
- 3章. 草枕の読解から、作品の構成や内省、風景描写の描かれ方を明確にする。
- 4章. これらの比較により、両者の関係性を考察し、風景の捉え方に関する知見を抽出する。

### 2.地形分析

#### 2-1.金峰山の形式

金峰山は、カルデラ式火山であり、周囲は外輪山に囲まれている。その影響を受けて、草枕ハイキングコースも市街地側から外輪山の切れ目を抜け、金峰山の麓へ入り、さらに外輪山の一つである二ノ岳を越えて天水町へ向かう道筋となっている。

#### 2-2.地形分析および考察

##### 2-2-1.分析手法

本研究では 3DCG フリーソフトである『カシミール<sup>1)</sup>』を使用した。同ソフトで全 221 点を打ち込むことにより草枕ハイキングコースのルートを作成し、同時に横断面を導出した。さらにその中から約 500m 間隔で全 21 点(01~21)を抽出し、各勾配(H/L)および各可視領域の算出を行った。また、可視領域の算出は、人間の目線とおおよそ同じにするため、地面から 2m の位置で行った。

##### 2-2-2.勾配(H/L)の結果

全 21 点の地点間の勾配を算出した(図 2)。

##### 2-2-3.可視領域の結果

全 21 点は掲載できないため、09 の可視領域結果のみを掲載する(図 3)。

##### 2-2-4.コースの分類

分析結果より、コースは四つに分類することが可能である。その分類結果を下記に示す。

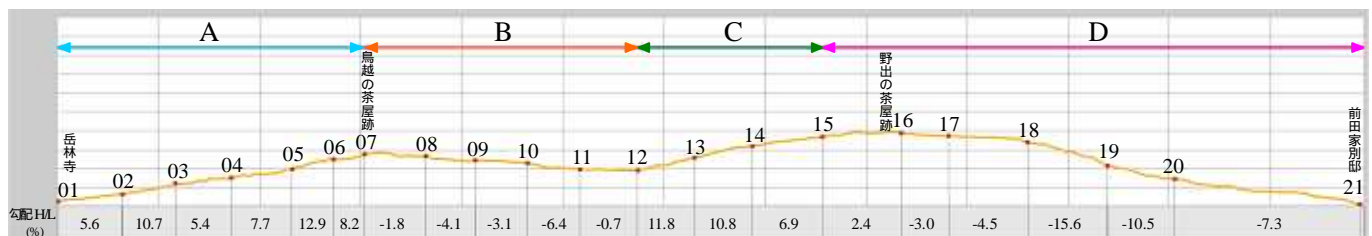


図 2 草枕ハイキングコースの横断面図と各勾配(H/L)

- A. 上りの急勾配。外輪山の切れ目を抜けていくため左右への可視領域が広がらない。市街地を俯瞰から眺めることができる。
- B. 下りの緩勾配。可視領域は外輪山内におさまる。
- C. 上りの急勾配。可視領域は外輪山内におさまる。
- D. 下りの急勾配。海が眼下に広がる。

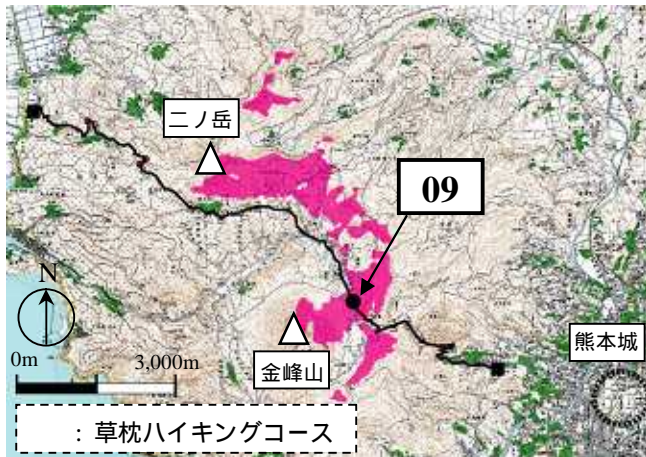


図 3 可視領域の一例

### 3. 「草枕」の読解

#### 3-1. 対象段落

本研究では、草枕ハイキングコースをモチーフとして書かれた1章の山路を歩く段落と、2章の峠の茶屋に立ち寄る段落を対象とする。

上記の段落は、主に風景描写部分と主人公である画工の内省部分が移り変わりながらストーリーが展開していく構成となっている。

#### 3-2. 風景描写の概要

対象段落の風景描写の概要<sup>2)</sup>は、川底のように大きな石が転がっている険しい山路を登り、菜の花畑の広がる平らな路へと出る。しばらく歩くと雨が降り始める。その中を歩き峠の茶屋に到着すると雨は止み、雨雲が覆い隠していた天狗岩が顔を出す。

#### 3-3. 内省の概要

対象段落の内省の概要は以下の通りである。<sup>2)</sup>

##### 1) 人の世の住みにくさを述べる。

人の住む世界は、人間関係が入り乱れており疲れ果ててしまう。そのため美しいものへの知覚が鈍感になってしまう。さらに、その世界からはどこへ行けども逃れることはできない。

##### 2) 自然の尊さを述べる。

自然の尊さとは、自然あふれる場所は人の住む世界とは別世界のため、人間関係から切り離され、美し

い風景をただ美しいと捉えることができる場所である。歩いている山路はそういった場所である。

##### 3) 目的地での人との関わり方を決心する。

これから山路を抜け、人の住む世に戻らなければならない。しかし、もどれば人間関係に巻き込まれ、美しいものへの知覚が鈍感になる。そこで出会う人々を風景の点景として捉えることで、人間関係からの回避を図ることを決心する。

##### 4) 画工自身を風景の点景として捉える。

雨に濡れていることや、足が疲れているといった感情を無にし、自分自身も風景の点景になりきる。

##### 5) 他人を風景の点景として捉える。

峠の茶屋から見える天狗岩を指差す婆さんを、その点景として捉え、深く感動する。

#### 3-4. 場面の分類

対象段落は、風景描写の概要を考慮すると以下の四つの場面に分けられる。その分類結果を下記に示す。

- a. 険しい山路の場面。(内省としては人の世の住みにくさを述べる場面。)
- b. 平らな路の場面。(内省としては自然の尊さを述べたり、目的地での人との関わり方を決心する場面。)
- c. 雨の降っている場面。(内省としては画工自身を風景の点景として捉える場面。)
- d. 峠の茶屋の場面。(内省としては他人を風景の点景として捉える場面。)

### 4. 地形と「草枕」の比較

#### 4-1. 地形と風景描写の関係性

2-2-4.と3-4.の分類の結果が  $A = a$ 、 $B = b$ 、 $C = c$ 、 $D = d$  と合致する。

#### 4-2. 地形と内省の関係からみた「風景の捉え方」

4-1.で述べたように両者が合致するため、地形と内省にも関係性が見取れると思われる。この考察に関しては発表時に提示する。

### 5. おわりに

本稿では地形の分析結果と「草枕」の読解との比較により、両者の関係性を示した。今後は小説中の風景描写および風景の気づき方に着目し、仔細な分析、考察を行っていきたい。

【参考文献】

- 1) DAN 杉本 : カシミール3Dのページ, <http://www.kashmir3d.com/>
- 2) 夏目漱石 : 草枕・二百十日, 角川文庫